



TITLE:

公開シンポジウム「日中韓の教育
課程・教育評価改革の動向」
2008年度: 開会の挨拶

AUTHOR(S):

CITATION:

公開シンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」2008年度: 開会の挨拶. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 195-196

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179669>

RIGHT:

開会の挨拶

矢野 智司（京都大学大学院教育学研究科長）

教育学研究科長の矢野です。このシンポジウムは、本学研究科と教育実践コラボレーション・センターとの共催ということになっております。このセンターは特別教育研究経費の教育改革経費で作られたセンターです。現在、さまざまな教育問題が起こっていますが、そのような教育問題はどれも複合的でして、たとえば「学級の荒れ」一つをとってみても、そこには心の問題もあれば、授業法に関わる問題もあれば、評価の問題もある。そういったことを専門家が、それぞれ個別に対応していたのでは問題解決はできないのです。そのような問題を、制度的な観点から、心のケアの観点から、あるいは学力の観点から、総合的な観点から専門家がチームを組んで問題を解決していこう、そしてそのような問題解決を通して新しい時代の教育学を生み出していこうというのが、京都大学教育学研究科で始めたプロジェクトの趣旨です。

教育実践コラボレーション・センターでは、問題を抱えた学校に出かけて行ったり、コミュニティ全体の教育力を高めるために童仙房に行ったり、さまざまなことを行っています。自分たちがやっている課題を、海外の研究者とともに共同研究していくというのも、その取り組みのなかの一つです。この公開シンポジウムはその一環として位置づいています。今日発表していただく先生方は、日中韓それぞれの教育改革を代表する推進者たちです。そういった最前線に立つ先生方に、教育課程あるいは教育評価の今日の到達点と成果、それぞれの国での教育改革の現在について、同じ場所でそれぞれの話を伺える機会を持つことができたのは、とても意味のあることだと考えます。

ここまでの私の公的な挨拶です。ここからのお話は、一人の教育哲学者の夢のような話だと思って聞いていただければと思います。私は昨年初めて中国に行きました。北京師範大学で3日ほど授業をしたのですが、慣れないことを長時間やっていますので、授業が終わると疲れ果ててどこにも行きませんでした。せっかく中国の中心の北京にしながら、観光名所には行かなかったのです。そうしたら、師範大の先生が気を使ってくれて、「矢野先生、静かなところがあるから、一回そこに行きましょう」といって、孔子廟に連れていってくれました。

深い霧がかかり、人影がなく、静かに乳白色に包まれた孔子廟はとても印象的な空間でした。そこでは、清朝時代の科挙の試験に合格した人々の名前が掘られた無数の灰色の石碑を見ることができました。石碑に掘られている名簿のなかに、歴史上の人物の名前を見つけたたびに感動しました。しかし、それよりももっと感動したものは、その石碑群の奥に、四書五経を一字一句欠けることなくすべてを刻み込んだ石碑が、何百と並んでいるの

を見たときです。それは長い間にわたり、あるときには生活に指針を与え心の支えとなり、またあるときには思考や生活の制限ともなった「聖典」というものの力の本質に触れた思いをしたことによるのですが、それだけでなく同時に、中国文化がなにより漢字という「文字の文化」であり、その漢字というものが書くことによってではなく、刻むこと、掘ることで生まれたのだというその起源を垣間見たことへの驚きによるものでした。

この感動はここに集まられた人々にとっても理解できるものではないかと思います。日中韓という3つの国は、漢字をもとに文化を発展させ、しかもその漢字で書かれた聖典をもつ儒教が文化や秩序の基底を形作った国々だと思うのです（もちろん儒教の在り方にはそれぞれ違いはありますが）。こういう東アジアの文化圏のなかで培われてきた、「文字を書く」あるいは「書を読む」ということは一体どのようなことだっただろうかと考えます。ここから何を言いたいのかというと、たとえば文化や歴史や宗教を共約可能性のもとに開いた PISA の学力観についてです。理科や数学は科学ですから、文化を超えた普遍性を持ちますけれども、しかし、国語での「読むこと」「書くこと」を考えますと、マクルーハンではありませんが、アルファベットを読むということと漢字を読むということ、あるいはそれぞれの文化圏のなかで読み書きをすることで培われてきた「伝統」というようなものは、随分と違うのではないかと推察します（もちろん「伝統」という言葉には特段の注意が必要ですが）。文化と歴史が現在の日常生活を作り上げているのだと考えますと、私たちの日常生活のなかで生きている読み書きの学力というものは、一体どのようなものでしょうか。それは西欧のキリスト教文化圏のなかで、アルファベットによって培われてきた読み書きということと、ずいぶん異質なものがあるのではないかと考えます。

東アジアの3つの国において、漢字や儒教の意味するところは個別に見れば、それぞれに違うでしょうが、それでもなおこの文化圏のなかで培ってきた共通した伝統や歴史というものが、今も私たちに身体化されているのではないかと考えます。そのように考えますと、将来、日中韓の研究者が協同することで、PISA の学力観とは異なる東アジアの学力観について考えていく必要があるのではないかと考えます。それは、同時に、PISA の学力観のなかに浸透している文化性や歴史性を、アルファベットで読み書きしキリスト教文化圏に生きている人々が、捉えなおす機会にもなるのではないかと思います。いまお話しましたことは、はじめにお断りしましたように教育哲学者の夢のようなものですが、今日、日中韓のすぐれた先生方のお話を同時に聞けることは、この夢が形になっていく出発点になるのではないかと期待したりもします。簡単ですがこれで挨拶にかえさせていただきます。